

大阪湾環境再生連絡会の取組みを中心に

神戸港湾空港技術調査事務所長 平 澤 充 成

On the activities of "Association for the restoration of environment in Osaka Bay". Mitsunari Hirasawa (*Kobe Research and Engineering Office for Port and Airport, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism*)

トップバッターですので、最初は少し固い話を、また私は北海道の出身ですので、少しそのような視点もまじえてお話します。もともと小泉総理の時代に都市再生プロジェクトというものの中で、海というものを都市環境のひとつの社会基盤という見方で捉えて、水質汚濁等が慢性化している大都市圏の海の再生を図ろうという話が出てきました。その中で、東京湾でも同じような動きが出たのですが、東京よりも歴史的に古く都市化が進んできた大阪湾でもこういう再生を目指していくということで、国だけではなく関西圏の2府4県3政令指定都市で構成される「大阪湾再生推進会議」という組織が平成15年に立ち上がってきたという

経過があります。その中で大阪湾再生のための行動計画（10年計画）が平成16年に作られました。その目標は、「森・川・海のネットワークを通じて、美しく親しみやすい魚庭（なにな）の海の再生をめざし」というものです。大阪湾再生においては、やはり都市と環境の在り方というものが大きなテーマになっていると思います。そういう意味で、この大阪湾再生のイメージ図のように、魚がいたり美しい水があったり海藻が生えていたりする背後に都市が立地して調和しているというイメージが、我々の目指す方向なのかなと思います。

表1のように具体的な目標としてはいろいろありますが、水質という意味では底層のDO（溶存

表1. 大阪湾再生の取組み～具体的な目標及び指標～.

具体的な目標	指標
年間を通して底生生物が生息できる水質レベルを確保する	底層DO 5mg/L以上（当面は3mg/L以上）
海域生物の生息に重要な場を再生する	干潟、藻場、浅場等の面積 砂浜、磯浜等の延長
人々の親水活動に適した水質レベルを確保する	表層COD ・散策、展望:5mg/L以下 ・潮干狩り:3mg/L以下 ・海水浴:2mg/L以下 ・ダイビング:1mg/L以下
人々が快適に海に触れ合える場を再生する	自然的な海岸線延長
臨海部での人々の憩いの場を確保する	臨海部における海に面した緑地の面積
ごみのない美しい海岸線・海域を確保する	浮遊ごみ、漂着ごみ、海底ごみ

酸素量)は5mg/L以上にしようとか、表層のCOD(化学的酸素要求量)は5mg/L以下にしようとかそれぞれ指標が設けられています。また特に大阪湾では昔から都市化が進んでいて、私が住んでいる神戸などは平安時代から埋め立てが始まっているという歴史があります。そういった歴史を含めて干潟がなくなっている中で、干潟を再生していきましよう、砂浜、磯浜等を延長していきましようという目標があります。また快適に海と触れ合えるような海岸線を延長する、憩いの場である緑地やゴミのない美しい海岸線を確保する、こういう視点で、平成16年度から10年間で目標に向かって進んでいきましようとしています。

先ほど行政機関で「大阪湾再生推進会議」を開いているという話をしましたが、行動計画は当然、行政だけでできるものではありません。これ

を進めていくためには、行政と市民の皆様、NPOの皆様、また学識経験者の皆様、あるいは企業の方々のご理解のもとに、連携協働の体制でやっていかなければなりません。実はこういう考えは大阪湾の再生を推進していく計画の中にもしっかり位置付けられています。

図1に示されているように「大阪湾再生推進会議」の中では陸域、海域、モニタリングの3グループが実際にそれぞれ活動し、いろいろ検討するという形になっています。とくにモニタリンググループは、まさに大阪湾の環境モニタリングをしていこうとか、あるいは市民にわかりやすく情報発信をしていくことを考えています。さらに、このグループとは少し切り離しているのですが、我々神戸技調の中におきましても、皆様のご意見を聞きながら、少しでもこれを進めていくことを考える

大阪湾環境再生連絡会(H17.11設立)

国土交通省

目的:大阪湾環境再生連絡会は、市民、学識者、事業者、行政が大阪湾の環境に対する関心と理解をより一層深めるとともに、互いに情報を共有化し、相互に連携した取り組みのあり方を検討、提案することにより、大阪湾の環境の保全・再生に向けた取り組みを改善、発展させ、「海と都市の関わり」の再構築に資することを目的とする。

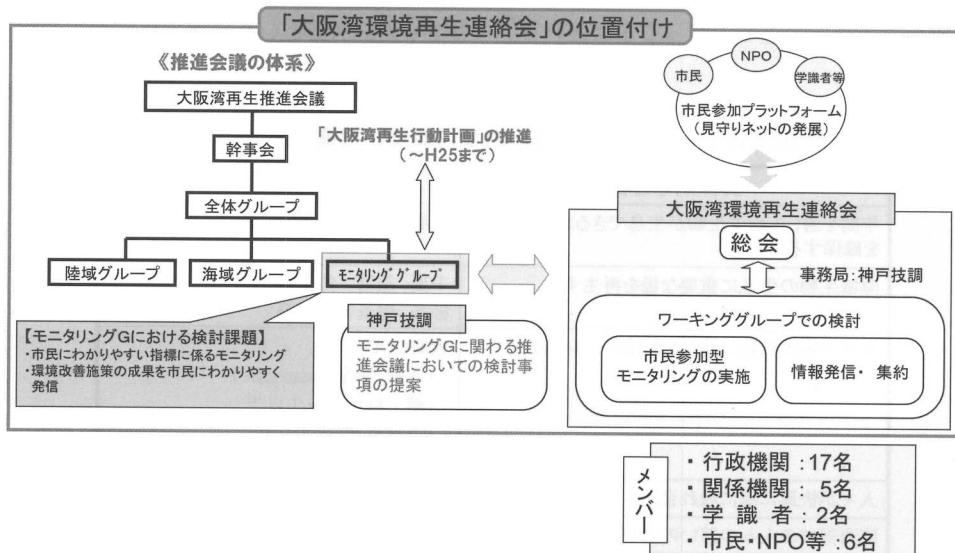


図1. 大阪湾環境再生連絡会の位置付け。

機関として大阪湾環境再生連絡会という組織を平成17年度に立ち上げています。その中のワーキングに参加していただいている方々も今日はお見えますが、市民参加型のモニタリングをどうするか、あるいはその情報発信の仕方をどうしようかといった検討を、行政機関、関係機関、学識者、市民・NPO等合計30名のメンバーで進めております。その中で、議論もあって、後ほどまた田中代表からのお話があると思いますけれど、「大阪湾見守りネット」も立ち上がってきました。

このようにひとつには情報発信、もうひとつはモニタリングということが大きなテーマでありまして、具体的にどういうことをやってきたかを説明申し上げます。第一に「大阪湾環境データベース」の構築です。より大阪湾の環境をよく知っていただくためには、どこか1か所にアクセスするといろんな大阪湾の情報を見ることができるといことが重要であろうということが連絡会の中で議論になりました。そういうプラットフォームといいますか、クリアリングハウスというのですが、そのような画面なりシステムを作ろうということになり、ではどういうデータを登録したらいいか、どういう見せ方をすればよいか、といった議論をいろいろさせていただいた結果、このような「大阪湾環境データベース」ができてきております(<http://kouwan.pa.kkr.mlit.go.jp/kankyo-db/>)。たとえば「大阪湾を楽しむ」では大阪湾の風景や生き物が紹介されたり、あるいは「大阪湾で学ぼう」に行きますと学習支援のマップが出てきたり、「環境情報リンク」ではいろんな行政機関が公開している環境情報にアクセスできたりします。このようにここにアクセスするといろんな大阪湾の環境情報を見ることができるといものを目指しながらやってきております。

次に、モニタリングと申しますか、市民と一緒にやっていく取り組みについてご紹介します。大

阪湾の環境を再生していこうとすると、ひとつはこのように広い大阪湾を相手にして技術的にどうすればよいかという問題があります（技術的環境対策）。しかしそれだけではできなくて、もうひとつは市民の皆様といっしょになった地域一体的な取り組みというものが非常に重要であろうと考えております。その中で、市民の皆様、NPOの皆様と一緒に大阪湾の環境が本当にどうなっているのか調査してみようではないかというような話になりまして、大阪湾生き物一斉調査をやろうという運びになりました。2007年度プレ調査をやりまして、これで何とかいける、あるいはこうやったらいけるのでは、というような話になり、2008年6月21日に大阪湾の15か所で皆様のご協力をいただきながら、一斉の調査を行うことができました。参加団体が11団体で参加者が500名弱という形で、天気も心配されたのですが皆様の熱意で雲を飛ばしたという感じでやらせていただきました。このようにいろんなところでデータが得られてきています。このような形で皆様に参加していただいて、和気あいあいと言いますか楽しみながら調査ができました。いろんなデータが集まってきたのですが、今年から始めましたけれどこのような情報を継続していくことが非常に重要だと考えております。あるいは参加していただいて、皆様に大阪湾の環境に興味を抱いていただくということがまず大事なのですが、これを我々のような行政機関が続けていくという場合には記録を残していくということが非常に重要だと考えております。そういう視点から今後どのような形でこの活動、調査をしていくかについては、またしっかり詰めていって進めていきたいと考えています。そういう意図もありまして、調査が終わりましてから、9月6日には、各調査地点の方々には調査の結果をまとめていただきまして、こういうポスターセッションをしたり、あるいは意見交換、報告をする

機会をセットさせていただきましてすごく有意義な場になってきました。

私は北海道で長く住んでいまして、2年前には釧路におりまして車で15分も走ればタンチョウヅルやオオワシが飛んでいるようなところでしたので、こちらに来て大阪湾を前にじつはちょっと愕然としているところがありまして、この広い湾をどうやって再生させるのかなと正直思っているところがあります。その意味でやはり先生の皆様とお話をしながら進めていきたいと思っていますし、

先ほど申し上げましたように、行政機関も一生懸命やらせていただきたいと思います、やはりこの広い大阪湾を再生しようと思いますと、あらゆる関係の方々、特に市民の方々と一緒に行動といいますか意識を持って進めていくといいますか、最終的にはそういうことがないとなかなか実現していくことがむずかしいのではないかと思います。そういう体制を整えていくことが本当に大阪湾の再生の一番重要なことではないかと思っていますところでございます。